

報告書

海外教育  
実践研究 D  
台湾

令和  
4年度

上越教育大学

# 目 次

参加者および担当教員名簿……………1

参加学生の報告書……………2-24

記録写真……………25-29



☆R4年度 海外教育実践研究D「台湾」参加者名簿

No.	所属1	所属2	学籍番号	学年	氏名	フリガナ	備考
1	学部	教科内容構成(英語)コース	20202041G	3	木田 啓介	キダ ケイスケ	
2	学部	先端教科領域学習コース	20202103L	3	中川 和哉	ナカガワ カズヤ	
3	大学院	教科教育・教科複合実践研究コース	20225757B	1	許 雲霞	キョ ウンカ	オンライン参加
4	大学院	教科教育・教科複合実践研究コース	20225753P	1	上村 菜々美	カミムラ ナナミ	オンライン参加
5	学部	教科内容構成(英語)コース	20202056E	3	小林 真優	コバヤシ マユ	
6	大学院	教科教育・教科複合実践研究コース	20225318P	1	間嶋 夏生	マジマ ナツキ	
7	大学院	教科教育・教科複合実践研究コース	20225314P	1	永田 裕太郎	ナガタ ユウタロウ	
8	大学院	教科教育・教科複合実践研究コース 生活・健康/保健体育	20225614P	1	涌沢 悠樹	ワクザワ ユウキ	
9	大学院	教科教育・教科複合実践研究コース	20225607L	1	牛腸 敏久	ゴチョウ トシヒサ	
10	大学院	国際理解・日本語教育コース	20215453P	2	山田 結花里	ヤマダ ユカリ	
11	大学院	国際理解・日本語教育コース	20215452J	2	福本 菜央	フクモト ナオ	
12	大学院	国際理解・日本語教育コース	20215451P	2	笠間 妙子	カサマ タエコ	
13	担当教員				北條 礼子	ホウジョウ レイコ	
14	担当教員				周東 和好	シュウトウ カズヨシ	
15	担当教員				瀧澤 典子	タキザワ ノリコ	

# 報告書

## 海外教育研究 D(台湾) 報告書

所属：教科内容構成(英語)コース  
学籍番号：20202041G 氏名：木田啓介

### ○日本の教育現場との比較

#### 《生活環境》

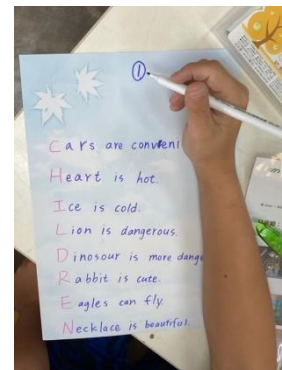
近年、日本では一人一台のタブレット整備が終わったが、台湾の小学校でもタブレットを活用した学習が見られた。また、台北市立大学附設実験国民小学校では、タブレットだけではなく、一人一台数字の書かれた小型のリモコンを用いて、授業に参加できる仕組みが整っていた。リモコン操作により、教師の発問に対する自分の回答をスクリーン上に送信でき、全員の結果を棒グラフで瞬時に可視化できるだけでなく、意見の匿名性を確保できる点が、個々の考えが尊重されやすく子どもたちの思考力を伸ばす鍵となっていると感じた。ギフト教育も進んでおり、上位層向けにプログラミングやアプリ製作といった時間が設けられている点が日本との大きな差だと感じた。

#### 《教師の動き》

スライドや教材を効果的に用いることで、授業がテンポよく進んでいると実感した。音楽×英語の授業では、リコーダーで演奏する曲を教科書ではなく、教師が選んだ曲で行うことで異文化理解や、小学校段階からリスニングの能力向上が図れると感じた。また、算数×英語の授業では、YouTube の絵本教材を用いるといった子どもが意欲的に学習できる工夫が凝らされていた。また、マイクを使って話す教師も多く、指示を通しやすくする目的だけでなく、子どもの発言を全体に発信する手段として活用する様子も見られた。

#### 《子どもたちの様子》

小学校中学年の段階で、英語の綴りを調べることなく正確に書くことができている子どもが多かった。塾に通っている子どもも多いとのことだったが、私の見解では、日本の中学2,3年生くらいの英語力があるように感じた。If や can, 過去形といった文法も使いこなしており、日本の英語教育の遅れを感じた。



(様式：海外教育研究D レポート)

## 海外研修D報告レポート

先端教科領域学習コース

学籍番号 20202103L：氏名 中川和哉

今回の報告書は以下の3点について報告させて頂く。

- ①台湾と日本の教育の違い
- ②授業をしてみたの感想
- ③台湾と日本の文化の違い（その他）

### ①台湾と日本の教育（私の経験した）の違いについて

まず初めに大きく差を感じた部分は、ICTの導入率と学校全体の情報化である。訪問した嘉義大学付属小学校と授業を観察して気づくのは黒板を殆どとっていいほど使っていないことに驚いた。授業のほとんどをスライドやテレビを活用して行っており、教科書を使う機会もあまりなく、教員が自ら作成したパワーポイントを使用して授業を行っていた。

次に発表の機会についてである。訪問した小学校では授業中に挙手を求めるというよりかは、内蔵されているアプリケーションの機能でルーレットを行い、それに対応した生徒が発表するといった仕組みであったり、教員が自ら指名して発言を求めたりする場面が多くあった。私は「人前に立って話すことが苦手な生徒をどう克服させるか」ということについて研究を行っているが、その一つとして機会を増やしていくことが大切だと考えている。そして台湾の教育ではその機会を日々の授業の中で設けていた。その環境に慣れているからか、生徒たちは自身が指名されても特に恥ずかしがる様子はなく、意見

に困ったとしても自分の持っている意見をなんのためらいもなく発言していた。自分が教員になった際には、これを参考にした授業も行ってみたいと思った。授業の中ではオンラインで自分たちの回答を送信し、自分たちがどのように回答したか分かるような仕組みもあった。算数なら4択ほどの選択肢の中からリモコンを操作して1つ選び、社会の授業の際にはタブレットを操作して自身の意見を送信していた。そして送信された意見を全員で確認したり、答えた人の中から指名したりして、どうしてそのように考えたのか質問を行う、というような形式をとっていた。日本の学校では挙手などの面から子どもの学習意欲を判断することもあるので、ぜひ評価に関する質問を行いたい。

次に板書の面である。基本的に授業は機械化していたので、ノートを取るような様子は見られなかった。しかし基本的に子どもが学習に困っている様子は見られず、ほとんど全員が楽しみながら授業をしている様子が見られた。単純な疑問として私は学習を行うにあたって「手の記憶」を強く感じている。

ICTが進むことに関しては授業がより効率的になることは間違いないが、子どもが内容を確実に理解しているのか、と考えると難しいように思える。この後にも記述するが、台湾の子どもたちのほとんどは学習塾に通っているため、学校だけの教育成果とはいいいがたい部分がある。その為、これに関しては様々な側面をみて判断しなくてはならないように思う。

最後に机の配置と机間指導についてである。日本の多くの学校では、全ての机が均等に並んでいるのが普通である。しかし嘉儀大学付属小学校では机がコの字型をしていた。また、教員が授業を行う際には教壇にいるということはほとんどなく、常に子どもたちの机間指導を行いながら授業を進行していた。それも教科書を使わずにスライドを使っているが故なのだが、このスライドも子どもが捜査している場合もある。学校では当番制にしてコンピュータの操作を子どもに部分的に任せて授業を行う姿が見られた。日本では到底考えられないが、日常的に情報機器の操作を実践できる機会があるのは素晴らしいことであるが、これも先ほどの板書と同様、様々な側面を考慮しなければならないように感じた。

## ②授業をしてみたの感想

私たちは日本の伝統的な文化を台湾の小学生たちに伝えたいと思い、日本の昔ながらの遊びである「かるた」を基にした絵合わせ感覚でできる遊びを通しての授業を行った。内容としては、授業の冒頭は班の学生である中国人留学生の学生が、同じ漢字を使う日本と台湾でも、それぞれ異なった意味合いの漢字についてクイズを行った。彼女は中国語を話すことが出来るので、その間は中国語での授業となった。その後、日本の伝統的なものや、代表的なものを知るたにした、私たちの授業の主題に進むような授業を行った。この活動に関しては英語で説明や進行を行った。

ここからは授業を行ったうえでの大変であった点を挙げていく。

1つ目は日本にいるチームメイトと通信して授業を行わなければならなかった、ということである。私たちのチームは学生4人のうち2名がそれぞれの事情があり、日本から映像を繋いで同時に授業を行う、という形式をとっていた。私たち学生は基本的に Zoom というアプリケーションを使用して端末同士をつなげる機会が多いのだが、台湾の小学校では基本的に Google meet というアプリケーションを使用して通信を行っていた。そこで普段とは異なり、慣れないアプリケーションを使わなければならなかった。

2つ目はプレゼンテーションを行う上で「Canva」というアプリケーションソフトを利用したのだが、台湾の学校ではあまり馴染みがなかったようで、少々組み込むのに時間を要したので、今後はパワーポイントを使って資料を作成したほうが効率的であるように思った。また、授業では現地の機器を使用して授業を行ったため、直前にファイルの内容を変更した私たちは、授業前に新しいものを送らなければならなかった。そしてその際に直接 PC に情報を送ることが出来なかったため、USB を用いて情報を送った。もし今後自分の PC や機器が使えなかった状況を考慮しておき、USB は用意しておく必要があると思った。

次に授業の内容に入っていく。

実際に授業をしてみて感じたことは、本当に小学生たちは楽しみながら授業を受けてくれている、ということである。授業が始めるまで、自分たちの英語が相手に伝わるのか、活動を楽しんでくれるのか、などさまざまな不安があったが、英語を話す際にはできるだけゆっくり、大きな声で話したり、身振り手振りを交えて話したりすることを意識した。授業を行ってみると想像以上に子どもたちは活動に夢中になっていた。し



かし夢中になりすぎるあまりなかなか指示が通らない場面も多々あったため、授業の冒頭などで、あらかじめ決まり事を作っておく（例：OO といったときには話す合図だから静かにするように。）と良いように感じた。授業の中では現地の先生方もなるだけ授業が円滑に進むように子どもたちに台湾語での指示をおこなっていただけたので、收拾がつかなくなることはなかったが、それでも進行してよいのか迷う場面があった。その場合は同じ教室にいる班員に頼んで置き、なにかしらのサインを出してもらうようにすればよいと感じた。また、私たちは授業を2コマ行い、2つとも目標は達成できたのだが、時間がどうしても足りなかったため、授業づくりの際には、時間に余裕をもって作成したほうが良いと感じた。授業の最後には質疑応答の時間も設けなければならなかったため、その点も考慮して授業を作成しなければならなかったため、授業時間は40分あっても35分と見積もっての授業づくりを行う必要があった。

以上が授業の感想である。実際に行ってみて問題点は見つかったものの、海外の小学生相手にオールイングリッシュで授業を行った経験は本当に貴重なものであり、達成感も大きく満足できるものだった。これからの教員生活、大学生活にこの経験が生かせるようにしていきたい。

### ③台湾と日本の文化の違い（その他）

最後に台湾に1週間滞在して気づいた点を述べていく

まずは子ども環境面である。日本の家庭よりも共働きの家庭が多いようであり、子どもの多くが学校の後に塾に通っているようである。実際に小学校の授業が終わった後の質問の中に「日本の小学生は学校が終わった後に塾に行きますか。」という質問があった。塾に通っているからか、子どもの多くは授業の中で困っている様子は特になく、授業が円滑に進んでいる様子がうかがえた。また、それが顕著に表れていたのが英語の授業である。子どもは教員が話している英語を漏れなく聞き取り、指示通りに活動を行っていた。中には聞き取れない子どももいたが、その数は想像していたよりも少なく、私たちが授業を行っているときも同様に円滑に授業が進んだ。また、塾に通っているせいか、夜市で小学生くらいの子どもの見かけることも多く、夜遅くまで（11時ごろ）まで出歩いていた者も見受けられた。また、食事そのまま夜市で済ませて

しまう家庭が多いようである。家庭で料理を作って食べる習慣がないせいも、台湾の学校授業では家庭科は無いようである。

次に交通の面である。日本とは異なり平日でも交通量が多く、中でも車というよりは原動機付自転車が多かった印象があった。歩道に入り込んでくる場合も多くあったり、基本的に店前に停めてよい場合も多かったりし、歩行に危険が伴うように感じた。実際に小学校の校長先生も日本との違いを聞いた時に同様のことを話していたそうである。また、タクシーに乗った際には、基本的に英語が通じず、読めないパターンも多くあったため、台湾語表記で行きたいところを見せることが適切であった。

次に学校給食の面である。日本の学校給食と同様であった点としては、バランスを考えて作られている点と、一般の食事に比べて薄味であるという点である。また、出てくる料理の種類として非常に似ていたように感じた。主食、主菜、副菜、汁物などである。しかし、主菜に鶏肉が使われた際には、中に骨が含まれていた。日本ではなかなか見ることが出来ない光景であるが、台湾では当たり前のようなものである。実際夜市で鶏肉の揚げ物を購入した際にも骨がついたまま提供された。

最後に交通（MRT）についてだ。日本の地下鉄によく似た形をしており、ホームや改札も日本のものと酷似している。しかし、劇的に違うものが一つだけあった。それは切符である。日本の切符といえばチケットのような紙でできたものであり、使い終わった後は処分されて可燃ごみになるが、台湾のものはメダルのようなプラスチックでできたものであり、使い終わった際はリユースが可能となっていた。また、交通量も多く、最低でも5分以内には目的地方面のMRTが出るほどであった。多くMRTが動くだけあって、この切符がメダルになっていることの効果は想像以上に環境面に対する配慮になっているように思った。

#### ④全体を通しての感想

今回の海外研修を通じて得たものは多くあったが、その中で2点、英語を使用してコミュニケーションを取ることが出来る有用感と、海外で授業を行ったという自信が大きかったように思う。海外で研修を行うにあたって不安材料であったことはまず、私たちの使用している言語を扱うことが出来ない、ということで

あった。私は過去に高校の修学旅行でカナダに行ったことがある。その際には言語の壁に苦しみ、班の中で誰が英語を話す係決めるなど、英語を話すことに抵抗があり、なによりも伝わらないことが怖かった印象がある。しかし今回は北条先生からの励ましもあり、自分から英語でコミュニケーションを取りに行くことが出来た。その結果として自分の英語が伝わる、ということと、英語を使ってのコミュニケーションの楽しさに気付くことが出来た。実際に日常生活で英語を話す場面は多く存在し、食事の場や学校現場、特に場所の移動中の際は小学校の先生方とお話する機会があった。最初は教育に関しての質問をしており、拙いながらも聞き取ってもらえ、意見交換をすることが出来た。そして何よりもうれしかったことは英語を通じてお互いの好きなことや国の事など世間話が出来たことである。これが出来てからは、より一層英語を使うことが楽しく、抵抗感もなくなり、自分から話しかけようという気持ちになることが出来た。

次に海外で授業を行った自信については先述した通りであるが、日本の学校で授業を行うこととは別で、今回の授業は、ねらいはあるものの海外の先生方が授業をしに来る、という形式だったということと、現地の先生が最大限サポートして下さったことで授業としては子どもが楽しんでいれば成功、というようなものであったが、なにより自分たちで授業を行う、形にすることが出来た、ということに大きな達成感を感じた。結果としては自分たちが想定していたことすべては終わらなかったものの、最低限やりたいことはでき、目標としていた子どもの楽しむ姿も見ることが出来た。

最後に今回のこの経験を生かして、自分が主体となり日本の教育に台湾で学んだ技術を落とし込んでいきたいと思う。研修の中で日本と台湾では特にICT活用の面で大きな差があることが分かった。日本の学校で今すぐに、というのは厳しいとは思いますが、出来そうなこと、例を挙げるとすれば、受講隊形の変化、子どもの発言機会を均等にするための手段、コンピュータ活用頻度の向上などを意欲的に行っていきたいと思う。

## 台湾における授業実践レポート

20225753p 上村菜々美

今回、海外教育研究Dの授業で3月8日に台湾の付属小学校にて授業を行った。私は家庭の事情により直接台湾に行くことができずオンラインでの参加となった。しかし、当日の授業や同じチームの仲間との準備などを通して多くの学びがあった。外国で英語を使って授業をするというのが初めての経験だったこともあり、準備は非常に苦労した。私のチームは日本のかるたを紹介するという内容だったが、かるたは言葉使うゲームであるため、小学3年生の子どもたちにゲームの面白さが伝わるかという点が非常に難しい課題だった。チームの仲間やこの授業に関わってくださる先生方と共に、どうすれば台湾の子どもたちが楽しめるゲームになるのか試行錯誤し、最後には非常にわかりやすいかるたのようなゲームを創作することができた。

当日、私はオンライン上で授業を観察するような形で参加したが、ゲームをする子どもたちの様子はとても楽しそうで、カードをめくるたびに悔しそうにする子もいれば、絵と文字が同じで喜んだり、早く次の言葉を言ってくれと求めるような様子もあり、終始笑顔が絶えずとても良い雰囲気だったことが印象的である。直接台湾の子どもたちと触れ合えなかった点は悔いが残るが、自分たちでゲームを工夫したり、授業展開や英語での指導法などを思考したりする経験ができたことは私にとって意味のあることである。今後、機会があれば海外に赴き子どもたちと触れ合いながら日本の文化を紹介したいと思う。

# 海外教育研究 D (台湾) レポート

教科内容構成コース 英語領域  
20202056E 小林真優

## 1. 実施した授業の内容

「紙相撲」を題材に、クラスの「横綱」を決めるトーナメントを行った。導入として相撲の紹介動画を見せたり、クイズを出題したりして、相撲への興味とゲームへの期待感を高めた。児童数分の紙力士・土俵や軍配・模造紙にかいたトーナメント表を用いた。

## 2. 授業準備と実践

11月から授業の準備を始めた。準備段階で苦戦したのが、教具の作成と細かなルール作りである。紙相撲班の学生は2人のみであったが、力士・土俵・軍配やトーナメント表など多くの物品が必要であったため、教具作成の負担は大きかった。トーナメントで負けた子も楽しめる試合数・勝敗の判定は誰がどう行うかなど、視野を広くもって工夫しながら準備を進めた。台湾の小学4年生の実態が掴めないまま授業を作るため、不安な点も多かった。しかし、模擬授業を通して教授・学生から沢山の御指導・添削や助言をいただいたことで、小学生を想定した英語表現や話し方、場の作り方を改善していくことができた。中でも、学生が実際に遊んでいる動画をスライドに挿入したことと、土俵の叩いてよい場所を明確にしたことが効果的であったように思う。ルールや遊び方を分かりやすく示し、ゲーム時間を多くとることが出来た。

実際の授業では、土俵の叩き方や叩く強さを工夫したり、勝ち上がった友達を全力で応援したりして紙相撲を楽しむ子供たちの姿を見られたことが、何よりも嬉しかった。シンプルな遊び故に、続ける内に飽きたり時間が余ったりすることに不安があった。しかし、早く試合が終わったペアは学生の声がけまで自由に紙相撲で遊び、他のペア同士でも紙相撲に取り組み柔軟に楽しんでいた。熱中しすぎて学生の声が届きにくくなることも多かったため、適度に落ち着かせたい場面での指示・立ち位置・待つことの大切さを改めて実感した。海外で行うオールイングリッシュの授業についてだけでなく、授業経営やICTを活用した授業づくりなど、様々なことを学ぶきっかけとなった有意義な体験をすることができた。

## 3. 台湾の教育

授業日前日に、嘉義大学附属小学校の授業を参観した。CLILや、ゲームのように英語4技能を高める授業を観て教師のレベルの高さに感銘を受けた。ICT設備や教育環境の充実、英語をコミュニケーションの手段と捉える子どもの姿勢が特に印象的であった。自分が教師になってからの小学校英語授業の理想を見出したように思う。

## 4. 感想

上越市での初等教育実習を経験してから参加したため、日本と台湾の小学校をより具体的に比較できて面白かった。故宫や九份などの観光名所、夜市やレストランのグルメも存分に楽し

みつつ、現地大学生との交流や小学校の教育に触れ、英語を使うことを楽しむ最高の1週間だった。学生のうちにしか出来ないような貴重な経験をすることができた。費用や予定調整の関係で参加するか迷ったこともあったが、挑戦して本当に良かったと思う。

この経験を教員になってからの小学校英語教育に活かせるよう、学生生活の1年間でさらに学びを追究していきたい。

## 台湾研修レポート

教科教育・教科複合実践コース

学籍番号：20225318P 間嶋夏生

### 1. 台湾研修への参加目的

私がこの研修に参加した理由として、2つ挙げられる。1つ目は、台湾は英語教育に力を入れているということを知ったことである。台湾の小学校では、2000年に義務教育のカリキュラムが変更され、2001年から英語教育が必修化されている。日本でも2020年に教科化されており、長年「英語」という教科を小学校のうちから指導している台湾の教育について学びてみたいと思った。2つ目は、国立嘉義大学附属小学校に通う児童に授業実践が出来るというプログラムに魅力を感じたからだ。また、まだ免許を1つも取得していないこともあり、この研修に参加するまで児童相手に授業をしたことがなかった。来年度、再来年度と教育実習を行うに当たり、この授業実践を通して、児童との関わり方を考えたいと思い参加を決意した。

### 2. 台湾市内の小学校や国立嘉義大学附属小学校で授業を見学して

1日目には台北市立大学附属実験小学校、2日目には国立嘉義大学附属小学校での授業を見学した。台北市立大学附属実験小学校では、算数と社会の授業を見学した。どちらの授業も、児童は教科書とノートではなくタブレットとリモコンを持って授業を受けていた。先生が出した問題を解いた時は、そのリモコンを黒板に向けると色が赤になり、問題を解けた児童とまだ解けていない児童が判別できるようになっていた。回答するときも、先生が電子黒板上でルーレットを回して回答者を決めたり、他の人が回答したのを見ることできるようにしたりしていた。

日本ではあまり見ない光景だったが、ゲーム感覚で授業を行うことで児童たちは楽しんで授業を受けており、先生が問題を出すと、毎回ほぼ全員が挙手をしていたことに驚いた。リモコンを使った授業は日本には導入されていないため同じようにはできないが、タブレットを上手く活用しながら楽しく授業が受けられる環境を作っていく必要があると考えた。





(左：算数の授業の様子、右：社会科の授業の様子)

2日目の国立嘉義大学附属小学校では、英語の授業3クラス、音楽の授業を1クラス見学した。この小学校でもゲーム感覚で授業を行っている様子が見受けられた。英語の授業は Vivian 先生、Sandra 先生、Michael 先生の授業、音楽の担当である Gabby 先生の授業を見学した。

Vivian 先生の授業では、バスケットボール選手やハリーポッターなど児童にとって身近な例文を使いながら授業を進めていた。また、指を使ったゲームを通して、英語を楽しんでいる姿も見られた。中でも驚いたのが、児童の机の位置である。日本では皆が教師の方を向く形が一般的だが、Vivian 先生のクラスでは、コの字型に机が向いており、先生の方を見やすい形となっている。そのため授業に対する意識も自然と向くのではないかと考えた。



Sandra 先生の絵本とタブレット端末を使った授業では、絵本を読むだけではなく内容に関するマインドマップを作製していた。児童たちは、タブレット端末で動画を流しながら、真っ白なノートに書いていった。線が入っているノートではなく、真っ白なノートに書くことで、児童がよりよい発想ができるようにしているのではないかと考えた。また、一人一人にヘッドホンが準備されていることで、周りの音を気にせず集中できるところがよいと考えた。



(右：Sandra 先生の授業の様子)

Michael 先生の授業では、感情表現について音楽や身近な文章を通しての学習だった。感情表現が含まれている歌を歌うときは、児童も盛り上がり楽しそうに授



業を受けていた。また、この感情の時はどんな動作をするかなどを穴埋め形式にし、児童たちに考えてもらうなど、英語での感情表現をするときの幅を拡げていたような気がした。また、教室の中にはたくさんの英単語がイラストや写真と共に飾ってあり、児童たちが普段の生活から英語を身近に感じることができるような工夫がなされていた。英単語は名詞や動詞など基本的な単語が並んでおり、英単語が出てくるたびに壁を指差しながら説明を行っていた。



(右：Michael 先生の授業の様子)

さらに、Gabby 先生の音楽と英語を掛け合わせた授業を見学した。音楽室には児童の机が並んでおり、日本の小学校ではなかなか見られないような光景を体験した。

この授業では、台湾で有名な建物や観光地などの名前のアルファベットを活用し、そのアルファベットを頭文字として一文を考えるというものだった。私たちもサポートに入らせてもらいながら、1班4人チームで考えていた。チームによって様々な個性があり、アルファベットの頭文字をカラフルにしたり、周りにイラストを描いたりなど児童が思うまま制作していく様子が見られた。チームで協力しながら英文を作り上げることで、英語力だけではなく、協調性も磨かれる授業ではないかと考えた。



### 3.紙相撲の授業実践を通して学んだこと

授業実践は、4年生の3つのクラスで行った。今回の授業実践を行うに当たり、台湾の小学生に日本の文化に触れ、日本に関心を持ってもらえるような授業にしたいと考えていた。そこで、選んだのは「紙相撲」だ。事前調査によると、台湾にも相撲文化があり、栃ノ華朝王などかつて日本で活躍した力士も輩出していたそうだ。この実践授業を行うに当たって工夫した点は、4つである。1つ目は、紙相撲を始める前に力士クイズを作成したことである。導入部分では、日本相撲協会の動画を見てもらい、力士は普段何を食べているのか、力士がつけているまわしは普段洗うのかなどのミニクイズを出題して相撲についての関心を持ってもらった。2つ目は、紙相撲のルールを分かりやすく説明することだ。なるべく児童が楽しむ時間が長くなるように、

簡潔になるべく分かりやすい英語で説明することが難しかったが、写真や動画を使ってシンプルに説明することを心掛けた。

3つ目は、1人でも多く戦えるように対戦形式をトーナメント式にしたことだ。1クラス30人ほどだったため、勝っても負けても楽しんでもらうためには、1試合の時間配分をどれくらい設定し、どのようにトーナメントを配置していくかが難しく、直前まで試行錯誤していた。はじめは、各自に四股名をつけてもらい自分だけの力士を作ってもらおうと考えていた。しかし、自分の名前を書く時間が長くなると予想されたため、四股名ではなくアルファベットの記号を付けることで時間を短縮することが出来た。2つ目は、紙相撲のルールを分かりやすく説明することだ。なるべく児童が楽しむ時間が長くなるように、簡潔になるべく分かりやすい英語で説明することが難しかったが、写真や動画を使ってシンプルに説明することを心掛けた。



4つ目は、教材のデザインである。力士のまわしのところは、色折り紙を使い日本文化が感じられるように加工した。また、土台の叩く場所に画用紙で作った「HIT」の文字を貼っておくことで、児童に叩いてもらいたい場所を分かりやすく書いておいた。どちらの教材も台湾の先生方から好評で、「障害のある児童でも使いやすい教材だね」と言っていた。後日、6年生で使用したところとても盛り上がったという連絡を頂き、多くの児童に遊んでもらえているようで嬉しい気持ちになった。



この授業実践の準備期間の中で、大変なことや悩んだこともたくさんあったが、どの児童も楽しそうに遊んでくれたため、準備をできてよかったと感じた。教師になってもこの感情を忘れずに、児童のために尽くしていきたいと考えることが出来た。



(上：児童が紙相撲をしている様子)

#### 4. 国立嘉義大学での授業や交流を通して

国立嘉義大学では、文化交流や性の多様性について学生と意見交換を行った。1日目は大学3年生、4年生との文化交流をし、年が近いこともあり英語を通じて話すことが出来た。しかし、英語が通じるか不安を抱えていたこともあり自分から積極的に話すことが出来なかった。2日目は大学1年生、2年生と大学探検を通じて交流を行った。1日目の反省を生かし、不安を書かかえながらも積極的に話すように心がけた。時にはインターネットの翻訳機能を使って確認することもあったが、大学生生活のことや「美味しいって台湾語でなんて言うの？」など言語について会話することが出来た。仲良くなった学生は帰国してからもSNSを通じてやり取りをしており、言語表現など異文化への理解が出来たとともに日本文化について深く考えなおすようになった。

#### 6. 文化研修

文化研修では、南北の故宮博物院や九份、台北101タワーに行き、様々なことを経験した。故宮博物院は、世界4大博物館に数えられており南北にそれぞれ博物館を設けている。故宮博物院の中で有名な作品は、翡翠で作られた「翠玉白菜」と豚肉の角煮のような「肉形石」であり、「翠玉白菜」は見る事が出来なかったが、「肉形石」を見る事が出来た。そのほかにも古代の青銅器や仏教の彫刻などを鑑賞することが出来た。

九份は、映画「千と千尋の神隠し」の舞台と言われている。そのため、日本語だけでなく、世界の様々な言語が飛び交っていた。細道の奥にいけばいくほど道が狭くなっており、出店や喫茶店など多くのお店が連なっていた。普段はなかなか晴れない場所だそうだが、当日は雨も降らず地上からは良い景色も観ることが出来た。

(下：九份の外観)



最後に、台湾101タワーで夕食を食べたりお店を散策したりした。餃子や小籠包、ラーメンなどの台湾を感じられるような中華料理を食べた。この研修では、牛肉ラーメンやターキーライスなど台湾でしか食べられないような食べ物も食べたが、日本でもなじみがある中華料理が多かった。まだ、日本のたこ焼きのようなものなど食べたいローカルフードがたくさんあるので、いつかもう一度台湾に来たいと思うきっかけになった。



(右：嘉義市 文化路夜市にて)

## 7. この研修全体を通して学んだこと

この研修全体を通して学んだことは、私たち自身も言葉を学習するに当たって、その国の言語や文化に興味を持つことを大切にしていかなければならないと考えることが出来た。そのきっかけはたくさんあるが、中でも印象に残っているのが嘉義大付属小学校で出会った一人の児童である。授業が終わった後、残っていた彼女は何か言いたそうな顔をして近づいてきた。先生が「あの子はあなたたちとお話したいらしいから、お話をあげて」と私たちに言い、ほんの少しだったがお話しすることが出来た。その少しの時間の中で彼女は、「私は、キティーが好きで、日本が好きです。よろしくお願ひします。」と日本語で話してくれた。私は、片言でも一生懸命に勉強し、お話ししたいと思ってくれたことにとても感動した。さらに、嘉義大付属小学校の先生やPTAの方が主催してくれたパーティーに参加したときも、「〇〇って日本語でなんて言うの？」など日本に興味を持ってくれる人が多かった。私自身、台湾について事前に勉強していなかったこともあり、台湾に住んでいる方々のように、海外の文化について興味を持っていたら、とてもよい異文化交流が出来るのではないかと思った。

また授業実践を通じて、児童生徒が勉強に楽しく取り組むためには、教師自身がどのようにしたら楽しく学んでもらえるかを考えながら授業を構築していく必要があると改めて考えることが出来た。将来小学校で英語教えていきたいと考えているのもあるが、授業の際には日本以外の国について児童に興味を持ってもらうため、自身の体験や児童に興味を持ってもらえそうな話題を通じて共有し、児童が「英語を勉強しなければいけない」ではなく「英語を勉強したい」という気持ちを保ち続けられるような授業を心掛けていきたいと考えている。

## 海外教育研究 D レポート

教科教育・教科実践研究コース

20225314p: 永田裕太郎

台湾では、台北市内の附属小学校と、嘉義大学の小学校の授業を視察してきた。台北市内の小学校、嘉義大学附属の授業の順に特徴や授業を参観した感想等について述べたうえで、相違点について述べる。

台北市内の学校において印象に残っているのは、生徒の席のレイアウトである。大半は黒板に対し対面で座っているのに対し、対面ではなく横向きに座っている生徒が見られたことである。また、授業中にノートを取る児童があまり見られなかったのが印象的であった。ノートを取らないことに関して賛否両論あると思うが、ノートを取らないことで、児童は授業や回答に集中できていると感じた。

授業の仕方に関しては、ICT を積極的に使っていると感じた。具体的には、児童がリモコンのようなものを用いて、回答を入力し、それを教師含めクラス全員が見られるようにしていた。そのため、教師側は、回答や回答時間をリアルタイムで把握できるようになっていたと思う。そのため、できなかつたり、つまづいている児童に対してピンポイントで机間指導をすることができ、とても効率的に指導できるのではないかと考えた。また、児童は他の生徒を意識しやすくなり、自然とライバル意識が芽生え、正答率や回答時間の短縮に繋がると思った。

嘉義大学附属の授業においても、台湾市内と同様で、席のレイアウトが特殊であった点が印象に残っている。具体的には、コの字型やL字型のレイアウトが見られ、また台湾市内の小学校のように、一部の児童の席の向きが異なっているケースも見られた。ノートに関しては、台湾市内の小学校と同様でほとんどの児童がノートを取っていなかった。

授業の仕方に関しては ICT を積極的に使っていると感じた。台湾市内と違った点は、児童同士や、教師と児童間でのコミュニケーションの機会が多く設けられていた点である。英語の授業であったため、コミュニケーションを積極的にしていたのだと考えられるが、アウトプットの機会が多くあるため、リスニングやスピーキングのスキルの向上につながっていると思った。

日本の学校では授業の中でグループワークなどの活動多く取り入れている印象があるが、あまり取り入れられておらず、問題を解き、その回答を教師が説明していることが多かった。以上については、台北市内の小学校と同様である。

授業終了後、先生方がノートを取らない理由や、宿題をあまり出さない理由について語っていたことが今でも印象に残っている。ノートを取らず、また宿題を出さないことで児童の負担を減らし、他の重要な科目に力を注がせたい旨についてもおっしゃっていた。

日本の授業の仕方と台湾の授業の仕方の相違点について述べる。主な相違点としては、

以下の3点である。

- ① ノートを取らない ②宿題を出さない ③問題を解くことに力を入れている
- ① については、前述のように賛否両論であると思うが、私はノートを取らないことに対して賛成である。ノートを取ることが目的化し授業内容が頭に入らないのが今の日本の現状であると思う。故に、今後は台湾の学校のように授業内で内容を全て理解できるような授業作りをすべきであると考え。なぜなら、効率的な学びや児童の負担軽減に繋がるからである。
- ② 宿題を出さないことに関しては、一部の教科で取り入れるべきであると考え。今日では、様々な教科で宿題が出されており、生徒の負担になっていると思う。科目に優先順位をつけて、優先すべき教科については、従来通り宿題を出し、優先度の低い教科については、宿題を出さず、授業内で完結することが好ましいと考える。
- ③ についても一部取り入れていくべきだと考える。入試やテストなどでは、回答時間の短縮や正答率が求められているのに対し、授業では以上のようなことを意識することはほとんどなく、資質・能力を育むことに力が注がれているように感じる。故に、資質・能力を育むための授業だけではなく、テスト等も意識した授業を行っていくべきであると思う。

# 海外教育研究 D レポート

保健体育コース

学籍番号 20225614 p : 涌沢悠樹

## 1) 日本と台湾の教育の違い

日本では、コロナウイルス拡大による影響で、2019年文部科学省が提唱した「GIGAスクール構想」の下、急ピッチでICT活用が進んだと言える。コロナ禍ではオンライン授業の整備が間に合わず大量のプリントが配られる事態が発生した学校もある。しかし、コロナ渦でもICT活用した教育をスムーズに実施できた国が台湾である。これは、嘉義大学の生徒らからグループワークで聞いた話しである。加えて、日本と台湾の学習環境やネット環境は似ている部分が多く、台湾が行っている取り組みは今後の日本教育において参考になると強く感じた。

日本の課題として、ICTにおける教育水準は先進国の中で遅れている現状であり、平成31年で平均5人に1台と学校のICT環境整備状況は脆弱かつ危機的な状況である。また、学校の授業におけるデジタル機器の使用時間は、OECD加盟国で最下位というデータもある。一方で、台湾の状況は早くからデジタル機器の導入やICTを活用した授業をすぐに取り入れ、コロナウイルス拡大の中であっても、何不自由なくスムーズにオンライン学習ができたと言っていた。

次に、台湾のデジタル機器に対する考え方や習熟度について述べていく。渡航した7日間の内、小学校の授業見学を2日間行った。その中で気づきとして、ノートを取らないことが挙げられる。これは、どの授業でもノートを取らない形態をとっており、クイズ形式を活用した教師と児童とのキャッチボールが多く見られた。国語や英語、社会の授業でも見られそれを当たり前のように児童はクイズに答え、それを教師は補足説明や主題発問とし、すべての解答が一致すれば、決まったリズムで喜びを分かち合う姿があった。これらを実現できるのは、教師のデジタル機器の操作力にあると考える。日本では、デジタル機器の導入を積極的に行っている現状だが、それに伴いご年配の教師らが嫌がり、また操作力の不十分による導入をしない傾向にあると思う。絶対使用しなければ行けないわけではないが、教師自身の力不足であるのであれば、課題解決に向けた方法を模索する必要があると考える。併せて台湾の教師らは、板書は一切せず、課題の提出や児童の考えをスクリーンに移し、意見に対して付け足す人や違う意見を持つものなど、グループワークやモーメントトークに持っていき流れと授業展開、話しやすい机の向き、配置などの手立てが多く見られ、ICT機器を中心とした授業の組み立て方であった。加えて、その場でクイズの答え合わせを行ったり、解答の出来栄を即座にグラフ化していた。こうすることによって児童の苦手な部分がわかり、次回の授業展開や指導方法に効果的に活用できることがメリットとしてあるのではないかと考える。

まとめに、日本も台湾も子どもたちの授業中の集中力が続かないことが課題としてある。台湾の授業では、ICTを活用し楽しみながら負担なく積極的に授業に参加させ、主体性と共同性が育まれながら日本とは違った形態で深い学びにつながっていくと強く感じた。

## 2) 台湾での合理的配慮と支援の実態

台湾での授業観察を通して、日本と同じような特別な教育的ニーズを要する児童が複数見られた。今回は1人の児童に焦点を当て、①台湾ではどのような指導・支援がされているのか日本との違いについて、②それについて自分が考えたことを以下に述べる。

はじめに、児童の特性である。注意が散漫しており、集中力が長くは続かない児童であった。具体的には、社会の授業において、教師が前に立って全体に話しているにもかかわらず、自らのタブレットで自分の顔を写真で撮って落書きをする様子が見られたり、自分の声を録音して編集している姿が見られたりした。また、他の児童が挙手をして発表する場面においても、発表している児童に注目することなくカメラ機能を用いて、教室の様々な写真を撮っている様子が見られた。

ここでの当該児童への指導・支援として、日本とは異なる点が2つあった。

1点目として、教師がマイクとスピーカーを常に身につけていたことである。教師が何を話しているかを伝えたいのか、それが明確ではない時、児童は何をしていいのかわからず授業とは関係のない行動をしてしまうことはよくあることだ。しかし、マイクとスピーカーを授業の中で取り入れることで、声が届かないことや指示が通らないことを防ぎ、一人ひとりの集中力を高めることができていた。

2点目に、授業の中でクイズが多く取り入れられていたことである。クイズを授業の中で行うことは日本でもよくあることだ。日本では、口頭で教師がクイズを出し、答えが分かった児童が答えたり、マルバツ問題であれば全体に挙手を求めたりするようなものであり、クイズへの参加不参加の自由度が高い。しかし、台湾はそうではなかった。ICT 機器を活用し、全員がタブレットで答えるまで次の問題に進めないシステムになっているため、クイズへの参加が強制されていた。そのため、当該児童もその時間はクイズに集中して楽しく取り組むことができていた。

これら2点のことは、当該児童だけではなく、その他の児童にも共通して授業への意欲関心を高める効果があると感じた。今後、自分が教師として授業を行う際には、ICT 機器をあくまでツールとして有効的に活用することで、特に特別な教育的ニーズを要する児童がより分かりやすく、楽しいと思えるように試行錯誤していきたい。

### 3) 体育授業を行って

台湾の児童たちへの授業では、1クラス2時間扱いで授業を行った。1クラス目では、元気いっぱいな児童が多く、全体的に活気のある授業展開であった。私自身が担当したW-upでは、拙い英語の中でわかりやすく端的に伝えることを意識した。しかし、発音や英語の意味がわからないといった問題があり、スムーズに活動が行えなかった。この問題に対して、現職である牛腸さんは顔の表情と運動の行い方から児童らの心を掴み、スムーズな活動に繋げてくれた。言葉が伝わらなくてもわかりやすいデモンストレーションであったり、示範があれば体育の授業が組み立てられることを改めて感じることができ、子どもたちの笑顔を引き出せることがわかった。

次に、2クラス目での体育授業実践では、私らの説明や指示に目を見て聞いてくれる児童らが多く、非常に行きやすかった。また、1クラス目で授業を行った分、余計な英語やわかりやすい表現に修正したことと学級担任が通訳してくれたことがスムーズに授業を行えることができた。そのため、説明の難しい活動であっても時間をかけずに説明することができ、活動時間が多く取ることにつながった。加えて、2クラス目での子どもたちの様子として、勝つことの執着とそれに対する思考の場面が多く見られた。チームで作戦会議を行ったり、活動する児童に指示を出したりと、運動の意図と特性を理解してくれた活動になったと思う。

まとめに、台湾の体育授業実践で改めて私自身の課題を確認することができた。また、牛腸さんからのご指導として、「授業に勢いはあるが、次の展開を考えながら先手で動くべき。外で授業を行う分、太陽の向きや子どもの向き、場の使い方等、子ども第一で考えること。」であった。課題として、英語で伝えるということが先行してしまい、場や先手の行動まで考えることができなかつたことが挙げられる。これらの課題解決や台湾の児童らに授業を行ってみて、改めて子どもの笑顔や楽しく活動を行う姿に日本や台湾という括りはなく、世界共通であることを認識させられた。言葉が通じなくても示範やデモンストレーションなどで、楽しい体育授業が組み立てられることを改めて知った。何より嬉しかったことが、台湾の児童たちから「fun」という言葉が授業の中や授業後に伝えてくれたことが大変嬉しかった。またこの経験を踏まえたことで、日本での授業では、こういった言語の隔たりが無く、活動を行う時間が多く設けられる。その中で、子どもたちが考えて運動や活動に取り組めるような授業を行えるとともに、できないことをできるようにするまでの指導・支援の質を教師として高めていきたい。



## 台湾での研修を通して学んだこと

教科教育・教科複合実践研究コース  
生活・健康領域 保健体育分野  
20225607L：牛腸 敏久

台湾での研修に参加し、たくさんの学びを得ることができた。現職教員という立場でも、日本と台湾の教育を比較することができ、とても有意義であった。今回の研修を通して学んだこと、感じたことを以下の項目で述べていく。

### 1. 台湾の小学校を訪問して



【台北市立大学附設実験国民小学校の校舎】

台北市立大学と国立嘉義大学の2つの附属小学校を見学した。まず目を引いたのは、どちらの小学校も敷地面積が大きいことである。また、運動場（グラウンド）も日本のグラウンドとは異なり、陸上競技用のタータンが整備され、バスケットコートも複数設置されていた。休み時間には、たくさんの児童が運動場に出て、思い切り体を動かしている姿が印象的であった。

体育に限らず、様々な教科において屋外で授業を行っている様子が見られ、全体的に活気のある印象だった。

### 2. 授業を参観して

台北市立大学附設実験国民小学校では、「HiTeach」という授業支援システムを活用しながら授業を行っていた。授業の中での課題に対して、児童が付属の機器を使って答えを選んでいた。誰がどの答えを選んだか、何人がその答えを選んだかなど、瞬時に確認できるため、教科書やノートを使った授業よりも、圧倒的に授業のテンポが速く、児童も集中して学習をしていた。「HiTeach」自体の凄さに併せて、教師が授業の内容に合わせて、効率的にうまくそれを使いこなしていることが印象深かった。日本では、このような教具が出てきた場合、まずその使い方を教師が理解するための研修が行われる。それから少しずつ授業場面で活用しながら、教師自身がそれに慣れていくといった流れであるが、参観させていただいた授業の教師は、かなり使い慣れている様子だった。普段から「HiTeach」を活用した授業実践を積んでいると感じた。



【「HiTeach」を使った授業風景】



【課題に対する答えを選ぶ児童】

国立嘉義大学附設実験国民小学校では、英語を使った授業を参観させていただいた。小学校の教師で、英語専科の教師ではあるが、日本の小学校の教師より格段に英語を「話す」「聞く」のレベルが高いことに衝撃を受けた。それと同時に、児童の英語の「話す」「聞く」のレベルも日本の小学生よりも高いと感じた。6年生の授業では、レベルと言うと日本の中学生が学習する内容を行っていた。児童への指示、注意も含め、課題の説明は、ほとんど英語で話し、それを児童もしっかり理解していた。児童が日常的に英語に触れ、英語を使うカリキュラムが日本の英語教育と決定的に違うと感じた。



【6年生の英語授業の様子】

### 3. 模擬授業を通して



【体育授業でのウォーミングアップの様子】

国立嘉義大学附設実験国民小学校4年生の児童と、体育の授業を行った。ウォーミングアップからメインの活動まで全て英語で行うことに、始めは授業が成立するのだろうかと不安に思っていた。児童もそこまで英語を理解できないかもしれないと聞いていたので、授業づくりや模擬授業を通して、とにかくシンプルにゆっくり話すこと、ジェスチャーや見本を示して、視覚的に理解できるようにすることを心がけ、本番でもそれを意識して授業を行った。「日本から来た先生」ということで、児童も興味をもち、進んで活動を行っていた。途中、休憩を挟みながら、児童との会話を楽しんだ。2つのクラスで授業を行ったが、1つ目のクラスでは、自分たちの説明がうまく通じず、思うような展開

にならないこともあった。うまくいかなかった所を同じ授業担当のメンバーと確認し、その反省を生かし、2つ目のクラスでは、改善を図ることができた。言語が英語に変わるだけで、話すスピード、話す位置、姿勢、表情など、児童の前に立った時に気を付けることは、日本での授業と何も変わらないと感じたので、やりにくさはなかった。体育は、身体運動を伴う教科なので、仮に言葉が通じなくても、運動を通して喜びや楽しさを共感できる教科であると改めて感じた。また、児童が、何とかして言いたいことが伝えられるように、英語の知識をフル活用させて、英語を話す姿こそ、日本の英語教育にも必要なことではないかと感じた。

### 5. コミュニケーション能力について

現職教員として、日本の小学校で十数年勤務してきたが、これからの社会に必要な資質・能力として、コミュニケーション能力は欠かせないものであると私は考えている。言語は言うまでもないが、相手を受け入れたり認めたりすること、相手の立場になって考えたり寄り添ったりすることも、大きな意味では含まれてくると思う。人と関わりながら生活していく、社会を創っていくためには、このようなコミュニケーション能力は必要不可欠である。そんな風に考えている中で参加した今回の台湾への研修は、自分の考えをさらに確実にすることにつながった。英語を話せるようになるだけで、どれだけの国の人とつながることができるようになるのかと考えると、日本の英語教育はまだまだ質を高め、量を増やしていかなくてはならないと考える。小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編では、中学年の外国語活動として週1時間、高学年では教科の英語として週2時間となっているのが現状である。これからの社会の動向を考えると、次期学習指導要領では、時数をさらに増やす必要があるのではないかと考える。世界の国々のたくさんの人とつながるためのツールの一つとして、英語の必要性を強く抱きながら、現場に戻った時には、外国語活動、英語の授業をより大切に、そしてより楽しく、All Englishで授業を行っていきたい。

# 記録写真







